FRN 79-2 -11—3-6

資料名 筑前志士傳

刊 (写)　　軸・帖 4 (冊)

所蔵者 九州大学附属図書館

函名 680 ー チ36

撮影 富士ゼロックス(株)

昭和54年3月7日

福岡市民図書館

箴前志士傳

一

680
チ
36

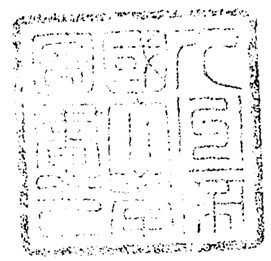
680
チ
36

筑前志士傳

一

筑前志士傳総目

卷之一　吉田重蔵良秀
平野次郎國臣　加藤司書德成
卷之二　野村望東
月形洗藏　詳
中村恒次郎　無可
江上栄之進　武要
卷之三　建部武彦自強
齋藤太六郎　定廣



衣非茂記直正
海津幸一正倫
尾崎総左衛門朝秀

卷之四

筑紫　衛義門
万代十兵衛常徳
伊爰清兵衛勝益
野村助作　省
安田喜八郎勝従
月形深蔵　弘
城　武平武貞
鷹取養巴　雄寅
森　安平　信度
中村圓太無二
伊丹真一郎重本
森　勒作　通寧
今中祐十郎　守直

今中作兵衛守忠

卷之五

松田五六郎安定　元中京羽
中村哲蔵敬信
仙田淡三郎　正弘
小藤平蔵勝忠
堀　六郎　義則
上原太内　元勝
尤坐謙三郎義直
吉田太郎　正實
仙田一郎　正敬
齋田要七尚義
瀬口三兵衛善和
大神壹岐磐沖
戸次孝之助鎧繁
權藤　幸助

筑前志士傳卷之一

筑前　長野誠輯

平野二郎

平野國臣通稱二郎大中臣姓月迎含月庵
柏香ハ皆其號なり父平壓吉三能榮氣節
あるを以て使杖綿鋪の術及び拳法を精究し
福岡藩先鋒隊に教師となり都甲氏を娶て
四男を産せり伯ハ都甲乙宣麻呂仲ハ國臣

叔父平山郁八郎能忍季八平次三郎能得と
以て皆養子となり國臣文政十一年戊子三月
廿九日福岡城下早良郡地行下町に生れ
小字巳之吉後乙吉また雄と改む幼にして
穎悟之児戲すでに常に己長となりて郡
童を指揮せり流を隊長大音權左衛門重信
の家に乞て甚使令に供せり流を班頭
小金丸彦六種一見て養子とし女を以て
之妻とす故に小金丸雄助種言と改め流また

列なり後源荒種德と改む著請方を附となる
き江戸邸に祇役し一ケ月京都に入り禁闕
を拝して志士と述べり　大内北山の御かまきさり
て手を仕へまつりき大君の命ぶ江戸に到り
寛永増上二寺に遊ひて金碧煌耀を見
して大内に迫絶する能見て大に憤懣を抱
き北順墨使入港一和戰の議論沸騰
に國臣是を見て幕府諸藩とも
皆此に見てこと思ひ武技を練り兵書研

讀む時は貴請方の屬吏皆弊風を安んじて
各私を営む國信是を矯正せんとして同僚と
合はして終に職を辞し安政二年岡部筑後守
等長崎諸用掛次定役に任せしも築地
冗費成卒の弊風を釐革せんとし國信同志の
戸田古郎茂弘吉田左郎正實と共に屬吏と
なり出張の役に勉めて事業を輔
成さんとせしに幕府は坂田九郎右衛門諸遠の
甚地に富せしに始めて武家の故實を学ひて

古を慕ひ直垂烏帽子を製す之時英佛二
國入港し幕吏是に会し甚禮を其人に
受るを見て益憂憤を抱き帰藩し付家職
等他職に轉じ中に終に職を辞し奏樂
を廢し書籍を售りて甲冑を買ふ或時烏
帽子直垂を着し笛を吹き街上を徘徊し
路人顧み怪むも意とせず知らざるの
如くなりと思へり又家を出て帰らざること十日
に及へり四方を捜索せしに武藏村温泉に

獲さうを放を向へい志摩郡馬場村の大馬場
を熟覧し那河郡志賀鴻人へ傳へ財術
を問ひ且温泉を浴しまりと云ふ又兄弟く
ては養家より頃をうけ人も測り難しと言
安政四年仕を辞しめしより二児をも顧みず
世父に家より還り平野次郎國臣と改め獨
醒軒と号し頭髪を存して剃しに力分
ち馬に故實より事しふみし最犬追物に心を
寄せるを地せ財を試みて書三卷を著し

同年六月邦君黒田少將（後中將）の出行を窺い
駕前にて上書せしに答りて幽閉せり
らるるも其身を顧みず志意を告
ましことと孫勝なりとて石敬の罪を免
さしむ此時幕府　朝廷を輕蔑し
敵慮を奉せて外國人の恐喝に壓され其
跋扈を制せることと能はず移る文易に偽勅を
結ひ志士憤言激論して天下沿く
騒雲上して濁らしめ此の國民と

の御製なりしと聞くに国民感激す
るに御製を賜りてこそ尾よ　かくてこそ
悩める君の御心を休めまつるべ四方の民も
かきくれ尊攘乃意切なり　安政五戊午攘夷乃
勅書を水戸中納言齊昭卿より授かりしに国民
欣然として志を通ずる時なりとて都甲楠美
と改め遊学の記して国を出て入京し同志を
求めし林民部権大輔良典田中河内介綾猷頼
三樹八郎　醍梅田源次郎　宮部鼎蔵等の諸名士と会し

義挙の志を論じ　時勢を感慨し
又近衛公中山中納言大原左衛督等に謁し
其志趣を窺得し　愉快の思をなせり
覇府の光圀部下総守入洛し　小林頼等数十人
を捕て江戸へ護送せしに国民慨歎し
京師を去り東西に奔走し長門の白石尚
一郎　豊後の河野萬門一敏筑後の宋和泰等
保臣等と共謀し志を成さんとし始め保臣等
勤王の志篤く少き徒に面晒をそひしに

余が郷国の身分なれば人と違ふ事なれども
今より国民常に彼等と親睦を厚くし常に錦旗
の下に従ひ申せんと欲するこゝろざしの事れい
四代後の古記録へ
く思ふ者なれば深く感じて帰り来たる
傷害　世の中かひ夫れされて同じ道の
今日はしく あるまくにと私云し議論しう
意気を投じ家を為の後は離れ申さんと
まして歎みあり洛東清水寺成就院月照恵海
尊攘の意深く近衛家入幕此賓と称せらる
幕吏是を捕へんと月照遁げて僕大概
重助の跡へ西国へ下り近衛公の密旨を諸大
藩へ傳へんと欲し福岡へ　　幕吏追跡
もとより西国なるもの故に薩藩取養已惟寅等宮崎
せし　薩藩へ北條右門時村工藤左門経徳と
相謀り薩藩へ入しめんとせしも導者なし
国民坐して環繞を受へより通ずるなれば
余送るとて月照を依頼の為に帰し

已ハ基侯となり 船岳院雲外となり 吉助と
三人跡後より船よりの艱関しと鹿児島
の達しもきたるも合一歴を若なるひとり
西郷吉之助隆盛情みつゝ潜匿せしめんとする
り幕吏追来り藩主より厳索せる
しも基侯より隆盛さらに日向より遁れんとて
船を発せしより所船の沖まで潮逆ひしるり
船近よれ且収よ追及んとせし月照発見をさる
を知り至頭諦観して暁より西郷と抱きて
海に投じて国居ハ辞眠して知らせを音なる
き眠をさめ 眼をひらき事を二子ひんし
遠て船をして海を探しもとめ
西郷を獲て治療を行ふ隆盛ハ薩摩
月照ハ終に死せり 時に安政五年十二月十六日
なり 国居重助と共に遺骸を葬る
棺中に書を入れ 吉助ハ縛せられ国居ハ
己の懐よりて而して重助ハ縛せられ国居ハ
逐きてより思へらく常服みて西行せハ薩

已ハ長使となり 貽芳院雲外と称し 主馬と
三人流後より船よりの艱関 鹿児島
より達しかきても合 一匿も若なし ひとり
西郷吉之助隆盛情みなく潜匿せしめ給へる
ゆへ幕吏追来り 藩主より厳索せる
とし 長多なり隆盛さらに日向より逃れんとて
船を発せしより 御船の沖まで潮逆ひ
船近よれ旦収よ追及らんとし月照気をさる
を知り 亟須諦視して 暁より西郷と共抱きて

海に投じて 国臣ハ酔眠して知らざる音を驚
き眠をさめ 眼をひらくまを二子入れ
遠て船よりして海を探しかり
西郷を救ふ 治療を行ふ 隆盛ハ模是し
月照ハ終に死せり 時に安政五年十二月十六日
なり 国臣重助と共に葬を営ませ行
棺中に書を入れ 重助ハ縛せられ 国臣ハ
己が懐より出して 重助に渡し 常服にて西行せハ薩
逐きたり 思へら

北風吹て氷迫骨すくしと常に身を離さ
ぬ烏帽子を垂髪を着て横笛を吹き市街を
徐歩せる薩の志士等平野氏を知り急遽
して旅費を与へ且護衛を吾視よと命
じ吉を八巷なく関門を出去り家を海
月照僧侶なるを悼み霊位を設け
静渓院鉄水月清比丘と題して香を焚ひ
忍向の始末を著し　西海波間北辰と題せり又
秋月藩家臣月照と称し　偽り　て十二月

中旬入京　吉を幕吏勅を志士を捜る
さて甚厳なれども怖ぢず　で近衛家の
諸り月照の送せて　中山殿下に関係を
書を呈して始末を概要を偏さ　て
告げ甚憂慮を解き　公言を
婦人を欲く　汝等凡んく　甚労を謝に
時勢を　意に任せん速に京を去り遠国
に潜匿し　と宣ひ　国居は見を安き富
立に告げ　て去らんと欲すれども版籍を

陸奥を〈き御〉下ゆきに成業〈て買金〉
即被をこそ料よ光て〈い留めれき遊覧〉
託して主ゝり備中連嶽の三宅貞士部高幸
の家よ寄て買書せ〈て〉よ利を失ひ去りて
赤間関氏白石尚一郎の宅よ匿り萬延元年
二月薩士堀某（忠尼藩門 東て去て東武り 貞通記）
在〈ふ水戸士一挙せ人ゝて我半ゝ孫り
しゝとも熟〈藩ハ〉のふ志を変ちて應せ
ゝりき稿よ此書ハ世ゝ藩よ献せんと欲せる

故よ君ふ託ゝとて西国よ附ゝ〈て〉ゝ者を〈ハ微り
して帰国〈て〉人〉よ依て薩庭よ留せ〈て〉た
部て焼報を受ゆきを密よ去りて又馬関
ゝ寓ゝ居て志士操田氏等り国信是
より薩藩人依頼せ〈ゝ〉き我知得けきハ己ハ志
意を汲んとて薩摩ゝ至り〈て〉ゝ関門巖
ゆて入ゝ事我許ゝきハ熊本ゆ還て
夢く志士を訪ひ玉名郡 松村大成古文（号空谷）
ゝ家よ始く寓〈て〉後密よ西慶〈て〉同志ゆ

五藤りまゝ言葉を匿きて一の市廨に長ふ
へきるのあるやきて速言せて一の文吏人捕縛
せんとしきまを百道彷徨して来大阪に係り
薩士高橋系の僕となりて鹿児島に入りし
ともを高を浪に　我胸のあるをひよりて
ハ姉をそこに　桜島山と称して去んと
もてこを廣士婦志たる貞通大久保正助利潤後利通
有馬新七正義三人國臣の者人なりしを知り
追逐して紙日清論を戯謔を交へ夜て

入りて別を去り大成の家に達して高部
鼎蔵増實永島三平山田典次郎等の用意を
受て日を送りて かく家を棄て奔走に
きしも父母を忘れ兄弟を廣の市廨の南流西田
村乃人居郷甚助諶字士小書を好き学を志
をはくして事を成國臣肥後より来り此人を
紙て親の安否を問ひまゝ自ら暗夜微れ
しく 西者も此時市廨の吏人國臣の禁を
犯して激論を偏りを憂い捕收を命して

捜索すること厳密なれども己が才略を恃み
通ぜざるべきを志ざすことを怖るるより
て免れがたし文久紀元田中綏猷清川八郎同明
安積五郎武負等肥後より来り長州志士と
合一し攘夷の挙を議し来る所今此諸侯
八共に謀るべき所にて只志士を募集して大挙
せんとす因て雄藩に依らずして草莽
義烈の徒いかほど力を尽すとも何事をか
成さんことを以て之を統合されたきとの人余ハ

薩藩にとうんとて別れ去る清川松村不平して
各詩を賦し送別を此に国臣秋月露
田中作八と称せり十二月福岡藩要人より
薩藩要人に書簡を授け使と偽りを書
函に己が意を述べ田天満宮見策等に
綴りて鹿児嶋に到り逆旅主人に託し
書函を達せんことを乞ひ小生函上に姓
名を記し是今此要人に会はんと怪しみ
る是筆者の語なりと分解して終ル

之廣廈を達するを獲ゝ之四天管見

策曰　謹觀天下之形勢也、西洋鴃舌之猾夷陸梁過陲、將令赫赫　神國國變為腥羶之荒域矣、譬猶人體釀癰疽之勢其機不安、固勿論耳、自癸丑夏墨夷始至於江門、千今九年、雖有先哲佳〻建言上策、悉作空論死談、於是乎忠臣解骨、寔可惜也、幕府有司、不啻無一英斷士、諂諛面諛之徒、跋扈府廳、內比周以愚其君、外距諫以蔽其明、宗族咸遠忠臣盡黜、水黄門烈公亦已即世、兄弟閲牆、外召其務、竟覆魁車軋軋不箴、泄〻咨〻、到千今日何也、曰為安苟且、狎長治之弊而已矣、於今黯然不察、益陷黠夷之術中、開港藉地、而使四海八面咸為渠之巢窟也、旦纜砲四方海灣之蠻舶、凡百餘迭更往復、必運物射貨者所要因糧於敵之術矣、夫虜浚國之膏澤、猶抽繭之緒不盡不止、詩云池之竭矣、不云自頻、又云誰謂雀無角、何以穿我屋、浸淫漸漬可不深謀遠慮哉、殊虜事高賈惟利維計、故不奪不饜、狡黠貪狼習為性也、是以賄惑庸吏、啗誘姦賈、鈎質銀餌洋錢、以鈎

吾金錢絪吾穀帛運諸海外所謂藉兵於寇齎糧於盜之失策也國非其國之幾戲欲不足且夫以海內有限之物售海外无疆萬國以必用易浮冗奚得莫困窮哉維欲奪我　神洲施術之門户絶粮活策也不可不鄣也頃年幸無風蝗旱雨之菑害而物價騰貴勝乎古凶歲者獨何也曰無他肉食無墨不精政務屢革鑄貨幣剝墜品量之故而貲非物貴獨貨貴也貲非貨貴不得其度也非其度而委之泛位強融通焉譬猶廳吏小人而乘君子之器也故錢者在貨与物之間而賤益究遂舍諸海外亦不足怪矣今夫諸國各領雖有紙錢而適似辨日用倘天下有事則何以汎通國用乎嗟吁愛哉散而不再鳩也古者足利氏稱臣異域阿貪鷙眼而壅驕奢今也通信外洋却所射貨穀乖其義也一轍而得失之途大相反焉是以方今下民墜塗炭甚者幾倡凍餒也維非天災也抑非地殃也唯為惟洋虜之荼毒故乎爾故彼專為主我分為客勢極相反蓋內姦所招也可謂率獸食人之類與莫赤匪狐莫黑匪烏厥罪既著焉加之

弁髦　綸命、私許交易為城下盟、刓艤巨艦而遺使外洋、且使蠻奴不二登山內地測量也、維無損怨而厚於冠矣、開國以降、未曾有之大恥辱也是誰之過也、不辨明矣、犯王命者必誅、古之制也、夫國非忠不立、非信不固、既不忠臣、而留外冠、冠知其釁而歸圖焉、不獨虞奇之所嘆也、天下有志之者、有誰弗吞聲哭泣切齒者乎、且夫粉飾昌平、保存有治、其布政也、不軋不物、以乱敗于上、而若皇民、一皆與乱同支也、是以上下乖離、天下之危殆、自有苞桑之幾、朽索馭馬之勢、矣、故神怒民叛、天變地殃、不可勝道也、已至此期也、天之所廢、誰能興之、中庸云、栽者培之、傾者覆之、詩天因其材質物也、且今我居內地、以欲自戰其地也、兵法曰、散地吾將一其志、欲一其志者不能不一天下也、一天下者、莫善於尊王室矣、詩云、湛露匪陽不晞、此謂也、欲恢復王道者、固不得係一家之私計也、伊尹放大甲、周公罪管蔡、夫豈不愛王室之故也、夫正名明分、以新耳目者、天下之公義也、行公義者、必因天神、因天神者必奉聖旨奉

聖旨則天必和之天哉神哉神哉天哉

今上皇帝希世之天縱聰明睿知神武不殺之　元聖也方今海內之勢雖類為胡猾見黷冥冥天道天祖之餘烈命脈未絕顯然任　祚亂也傳曰國無道而年穀和熟天贊之也鮮不五稔夫天禾奪吾食幸而有年者　陛下修德敬神之故也苟今有敵氣冢君而請奉　鳳命獎　王室則有志邦君不招而應焉於是一宇宙海內攘斥戎虜捲席宇內之策得而可施也獨於遲速預難期焉耳矣夫閣王道而資伯業者管晏之徒也固不足為焉憎霸業而詢王道者孔孟之行也雖然彼土國風變姓更命而從天道三代行之孔子則不然崇宗周欲興道於東方故西土雖立道與　皇國立道不全同以孔子之心為今日之心則彼何人也吾何人也產靈神孫可不勉哉伏請　公以孔子之心獎　王室為湯伊尹暨周召伯其作魁首天下哉臣熟考不可猶豫之機有六也方今天下之形勢雖陽似治既已亂也眼未見旌旗耳未聞金鼓僮一間而已矣應此時武備嚴整也固衆

所知焉、然陽治之勢、亦有不可反者、苟叛之則一家不濟、一家不治、是狃安逸、腐積弊之癖也、夫人相黙而守弊風、無他術也、故滔〻武夫、跨治乱両端、困于葛藟、一日窘於一日、何有餘暇、整於武備哉、兵法曰夫衆陷於害、然後能為勝敗、兵士甚陷、則不懼、無所往則固、投之亡地、然後存、陷之死地、然後生、因獸猶鬬、況於人乎、如令微臣謀之、請奉皇命、挙兵使海隅蒼生、如同舟遇風、登高去梯、一朝甚陷而無所往、悪洋夷、如嗟蛟畏、校虜、如鬼蜮、座薪嘗膽、汉上下同欲、一途擯冠、則不令而舊染汙俗、咸惟新、武備亦從整焉、人心不新、則百術無效矣、今夫不欲嬰鼓而猶豫失機、偶然自渠閑兵、則寇又寇、必有渇而穿井、戰而鑄兵之後悔、與倘臨其期、則嗟臍何及焉、故今日急務、在決於戰、法曰先處戰地、而待敵者、佚、後處戰地、而趨戰者、勞、故能戰者、致人而不致於人也、圖之此時、乃千載之一時、不可失機是、一夫一動一静、天地之理也、治窮則乱、生亦天下之恒也、何足怪焉、図難於其易、為大於其細、制治于未乱、保邦于未

危者　聖明鹽梅之任也、而上下未定、則必有柏舟考槃之恤、而謀臧不從不臧覆用、是亦古今通患也、雖　聖凶宄遠、廟謨未決若內亂發、則列國雋豪一時昂沸、不識所歸、如春秋無義戰、海內各區區分瓜裂、大以凌小、強以害弱、或割據或侵掠、拆國併地、大家終滅、匹夫更起、以亂平亂、鬨爭且不可息矣、殊鯨鯢者、必競霸圖乎、譬震漢季曹操、魏未司馬懿之威、如中原逐鹿、或宋襄禱次睢之謠、鬼則名義湮滅、冠履顛倒、前門斃虎、後門狼進、懼　天朝有如無、私利惟謀、贍一天萬衆之　至尊、猶寓公、則雖聰明叡智之　至聖、然　天裁之道、不可行焉、如應仁以來、永大年間、天朝衰耗窮蹙、公卿鬻采之古轍、則雖有智士仁人、若恢復何當、此時也、獨不啻內亂外寇、閱釁侵邊、掠陸欲甚者、却籍天刀以併土領、利暴亂豫、不可猷也、請縱述　微意　夫以正治國、以奇用兵、故之常也、願一二邦君戮力倚嶮以保　龍駕舉親兵、於未亂而制之、海內一定、而後擯蠻外冠、恐無大敗矣、發兵避敗者、蓋擬誰昔　武尊、鑽燧避災之

英第矣遣奮念熟難滋甚焉今夫疾戰則存不疾戰則亡者維死地也兵法曰死地則戰不可不敢決也然今通信詢和者肖有所之故絶文問矣所以示其不活也不可覓機是二安改戊午失策之時　青蓮院宮自幽閉他寺謂相國禪寺也於今四年其故何也曰非賓有不德也既著明矣怨出井伊氏之姦賜欲蓋忌宮之明敏矣邁也若楊明楊梅轉法輪台鼎亦開厄間窮也皆嫌其忠良之故耳而後猶未促遠院者抑誰之罪也深可怪焉詩曰誰知烏之雌雄此之謂也

今　親王偶以無辜罹斯肯綮而天下无怪之百邦君一未能救之咸結目杜口悃乎鎖鞅岳拱默然以為得計也豈謂人臣之節哉古語云君憂臣勞君辱臣死故微臣碩訥焉且夫　帝之於　親王也猶堯舜於禹武成於且賓　王室之復心矣詩云念彼共人涕零如雨古人為臣發嘆與夫稱名屈指自百世後觀之果不無議論乎如　公室故國大藩也安得在其外哉後之見今與今之見古何異之有不可不盡矣且如　公國提封千里帶甲百萬虎賁龍將羅

列其下、積粟如山彈苵如岡、誰得爭其鋒而屈膝於
姦雄之下、尤有志之所慚、君子所不取也、傳曰婁不
恤其緯而憂宗周之隕、況一姓之國、況丈夫乎不可
忍機是三、夫邊境者國之尾也、有外寇、古人譬之牛
馬有蝨、能掉其尾、而攘斥之、不敢與膏血、其可以
國而不如牛馬乎、去冬越之新瀉開港之期、已滿矣、
抑此地也、北鄙邊陲　皇化未遍、文華未開、土民頑
鈍、固陋譬猶前肥之島原與後肥之甘艸、風氣粗相
類焉、猖獗乘厥蠢爾、竊施妖教、煽惑愚民、則闇移潛
化、黙傾凝結、而竟不可解也、老少男女相率為渠鄉
間、果生不測之戎毒、與寛永年間、西陲覆轍、亦應憶
焉、自各所有開港、最感毒教沾染者、止在此地也、今
日患之也、雖猶七年之病、求三年之艾、然亦自今畜
之、則猶或可逮、不然則病日深、死日益逼焉、傳曰一
日縱敵、數世之患也、不可猶豫、機是四、夫畿内近海
三津（謂浪華境兵庫也）開港盟約之期限者、當壬戌年十月
滿也、抑此三津開港也、固幕府之私盟、而所未安
宸襟也、豈忠臣所忍哉、嗚呼、霞將堅氷至之時、安

得不寒、心乎、且斯三港也譬猶　禁闕庭階、赤石及
由良之迫門者、東南　宮門也、未能自外洋衝闖幾
内天險矣、易曰王公設險、以守其國、然況不啻排
宮門之險、未衛、以庭階之地、畀猾虜、為彼巢窟乎、如
然、則如開幬進蚊、疇得安寢哉、要節危機、斯導倘可
忍之、何不可忍也、可謂天下無道極、夫鷙鳥將擊、卑
飛斂翼、猛獸將搏、弭耳俯伏、姦豈在明、奈謀心甘、故
聽於無聲視於無形、以黠夷伎倆、不可不察也、唇亡
齒寒、若三港開則　鳳闕危難、甚於累卵矣、可謂資
榮枯存亡之秋也、孩于其期、則癰疽開入于腹心、何
異雖有明醫良法、恐難濟焉、詩曰迨天之未陰雨、徹
桑土綢繆牖户、正今日之誠也、當此一大急機、諸邦
家君、悠悠然、更不駭重身顧祿、深室端坐、徒邁株兔
之小計、遂速不測之變也、其人臣之節與、抑人牧之
道與、恐不兩相得與、天下後世其責不脫矣、如　公
室義氣滿國、君臣相遇、必有秘策哉、夫大丈夫者、蠖
屈俟時、見幾求信也、固其所矣、易云見幾而作、不俟
終日、此之時也、所謂畏首畏尾、身其餘幾、可斷焉、傳

曰臣義而行不待命侍文王而後興者不豪傑也即今為天下之渠魁踏仁詢義奉　聖明拳事者實覆幬之英雄乎哉飢者易為食渴者易為飲如今一國詢義拳旗則應之也猶雲從龍風從虎而海內之志士仁人盡為渠魁所有焉得人則有功也奉　王命伸不庭天下之正道盍悍議事乎若猶豫失機瓶凍知寒則怒何瘳悔何逮哉法曰用兵之害猶豫最大且夫貴神速夫海內者由一室譬有同室之人將鬬者則被髮纓冠何不救之哉古人有言曰動靜有適不可過此之幾也語云有殺身以成仁方今不行仁義而俟何時乎仁之勝不仁也孟子譬之水勝火固其理也以義誅不義三略辟之決河而溉爝火其克必矣蹈仁行義赤心以報國斷然決議猶蕩蕩王度嚴然發機擯曉曉醜虜以解　王懷矣（御覽曰英里生繁陽命計利芳須臾幾多乃三甲斐南岐武藏野能原又曰異松毛泥來流人裳伐里奈久掃八尽沈平神尼毋我南）

緩吳折足覆公餗成否天也雖寘諸度外可也何必妨仁義乎不妨仁義則何憚之有焉天道皇皇日月有常順天者存逆天者亡易云自天祐之吉无不

利也、何憶之有乎、今陷夷術中、而將開三港者、後人也、然未滿其期、而防之者先人也、後人發、先人至者所謂迂直之道也、法曰、先知迂直之計者勝、必不可失機是五、夫事必有時、物必有節、時者在天、運動不止、節者在地、時至物成、維天地之常也、節時不感、人之事也、自昔瘞社稷失宗廟者、天違地離人叛而后滅亡、外傳云小凶則近、大凶則遠（近五年遠十年或二十年）五稔者天之紀也（五歲再閏故謂紀也）十年者、數之紀也（九數之極十而歸一）事數見皆秋傳、夫自癸丑計之至明年壬戌十年也、自戊午筭之、又至明年五年也、加之彗見者、天垂象示其時也、傳曰天之有彗也、以除穢也、又曰彗所以除舊布新也、且彗星在北斗傍、而指斗柄次斗者野佗二越等分野矣（史記註云孝經內記曰、彗出北斗兵大起又曰所指其處大德舊說如此）由是觀之、改革之幾已萌、且應為外寇侵北國與明年營事旁其時也、皇天已定、必有大功矣、夫時者難至機易失、違天不祥、得時而不成、反受其殃、不可失機是六、今夫　親兵拳動如何、曰非臣不肖所善逮也、抑亦不莫說、請試論之、方今一二邦君密翕志、

固結義竊奉　詔命、脫然拳兵徵奪浪花城、奉　旄
駕（今竊作　臨行之說者莫不謂叡山報焉等對高野也、天此四險者、百定坊有是猶攻墓兵營陣之辨也、是以古來為播邊之地者、一時之良策矣、雖然知其利未知其害也、請試辨之、四山險要雖似拠之無害、佛徒為之口實、憂携兵而行非業、不好國政、雖織田氏之智勇、遂至難制焉、於是佛徒、茲蔓、永作國土之害、斷而不可倚憑之地也、抑浪華之地也、富商殷賈孔多矣、故徵粮糧及金銀、償急用頗難也、且拠千此地、制東國運漕之權則糧道之斷續、各所欲也、）厚護之、而賜冠令幕家及三家三卿列國家君、略觀丹黑之情、則天下岐應間否之三、應者何也、曰一諾無二者也、假名之謂應是守義竭力忠臣、更勿論耳、何謂之間也、曰半信半疑籌事兩端者也、假名之謂間是見勢就利必動者也、如是智者深所不為患也、否者如何謂名義不明逆命者也、假名之曰否是闇將而無賢臣智士、如此深不足畏之徒也、今夫以應師往一否賊勝之、則間徒者不召自服、固囊中物爾、勦應間二力、以計否賊、則不期平焉、於是一帰之幾、預可觀也、令一之而不能反者在　聖明良弼之方寸、易云苟非其人、道不虛行、可附諸其任而已、干時擬　日本武尊、及　来目皇子、　當麻皇子、　護良親王等之舊例、迎　青運

院宮為征夷大將軍、以舟楫虎賁師、奉　駕遵　武
尊東征之佳祥、謁于伊勢　神廟、直使　神軍正〻
堂〻、行東海道、則晌〻胥謁者、咸簞食壺漿以迎
王師、書云、民之所欲、天必從之、且仁人無敵天下也、
誰得抗焉、易曰天地以順動、故日月不過、四時不忒、
聖人以順動、則刑罰清、而民服矣、不可疑焉、姑占
行宮于函嶺、撫征東國、兵刃不血、概略靡服焉、爾辭
職謝過、則懷之、雖然長木之斃、無不標也、國狗之瘈
無不噬也、若叛命搆兵、則征伐之可也、王支無監、誰
不竭力奏捷哉、以是觀之、海内一定之略、豈難甚施
也哉、兵書曰、除害在於敢斷、斷而敢行、則鬼神避之、
況今所行、上尊　王室、下利萬民、外拂夷狄、内安國
家、乎孚信不悖於天地、至誠感神、天地神明必擁護
之、竟三分一帰、則　王室勃興、溥天率土、拳　王土
王臣也、於是海内為一家、上下同欲、以可擯殲胡塵
也、夫外寇之動靜如何、曰虜逆豫雖難籌、請縱陳愚
察也、柔則茹之、剛則吐之、如今突然兵起、其神也、
若從地出、若從天下、則四方淹留之群夷愕然、膽落

髮攢、一旦盡人舡而退帆、各眂其國、告酋長、得酋裁、而後更発一二艘隱映倘佯于邊海施〻必探內情而觀機將乘或欲援逆徒而逞其德與於是內姦必招焉、故海內一帰、為攘夷第一之策也、其中偶侵邊郡、何逮大事哉、是戎虜姦疑之槩情矣、聞內兵発也、忽焉決幾、一念而発大軍、雷奔電擊者、伎倆之醜虜攸未能也、雖然敵不可恃、傳曰不備不虞、不可以師迨栖〻未寇、遽乎均天下、而布　命無海邦君領主、摂泉近海、及赤石由良加田之迫門、伊勢　神廟近岸、出雲大社濵海等、援使衛之更　詔五畿七道、當令滿國海岸、悉築土塘石砌砂垣等、蓋為鄣夷煩也、簡地利、搆砲臺、密烽燧、號砲響應之制、明斥候、允營一里一堡、十里一城、使　大八洲、為一堅巨城、各國邦君、及大夫士、皆在其國而繫死生存亡、於社稷及宗廟墳墓、衛之、加以大艦、充也奇兵、與應援之用、知戰地与戰日、而千里會戰、譬如常山之蛇、四頭八尾、觸處為酋、以抗寇、　天子以躬先之、統馭海內、則渾〻一屯之疆國、用、故我專為一、敵分為十、於是乎以夷

制夷之策得而可施也、法曰以下攻其一也、則我衆而敵寡、能以衆擊寡、則所与戰者約矣、主客之勢、固應如斯也、又曰以守待攻者強、雖有狂瀾怒濤、豈敢妨洽內哉、雖然積年之病、望深、非不懲宜休也、必各虜合從連衡、而屢來襲邊要、擾內地、兵交戰連、或解或結、或款或叛、勝敗甘闌、豫不可期、略莫窺歲、非數十年不定矣、假令一旦雖有清波瀾謀壞球之勇情於我不可休也、厥中或五六月、乃至七八月、非无甘戰之日、於是察機當滅佛也、是所以一民心、而使無比德、淫明民心不一、則眩惑耶、蘓、不可不禦、諸未先矣、夫　中國有佛之弊也、既歷二千歲、老習、豈以一朝一夕之威容易泯之哉、且外寇未平、適以甘戰之時、行之則吹毛求疵、內外混亂、而國必危、抑有說與、曰英雄之謀、変也、志氣恢廓、意氣赫然、大不噎、繁不倦、雖有百難千患、貞夫一而不動、從容不迫、策略如湧、胸中尚有餘者也、譬猶湯始征自葛、載十一征、而無敵於天下、遂歸成功者是也、且今滅佛也、非追僧裂經、毀堂摧像、破鐘以差病鬱、快一時心、而搆怨招禍之謂也、佛入中國也、自西土、而彼土

至唐武宗廢佛寺　中國未有一廢佛寺者，故土地之不大而佛寺多，印度西土又下經乎高陵，幸而宮以免，四塔之圍矣。夫塞水不自其海，必復流，滅禍不自其基，必復亂，故先除佛寺本山為第一。有僧宦者，轉之朝宦，妃稱妻，妾賜祿還俗，在諸國各領者，屬其主，欲仕者，与之祿，附職者，予其器械，婦農者，畀之田地，令寡婆娼妓，妃僧徒，而安其生，猶為之行水，則何患何憤，垢塵汙穢，賣僧，必悅以還俗耳，偶有奇衺之僧侶，黨比作寇，伺之何難焉，於是鑠銷梵鐘銅佛銅器，以鑄錢幣，徧施天下，有諸國者，鑄煩以備海岸，或以為彈丸，若堂塔坊厦者，隨使作城堡砲臺營舍，獨於佛經佛書者，漫無散乱，盡聚以宜為灰燼矣，如此則有憂浮冗，以為賓用，足食足兵，民信之功也，一弊亡而三利生也，兵書曰，患在千里之內不起一月之師，患在四海之內不起一歲之師，今患將在四海之內，而欲事謀海外，故曰內政，今日之急務也，所謂內治未得不可以正外者，是也，膺其時，而觀海內，必兵卒有餘之勢也。凡佛寺五十万，平均為一寺四人，則都二百萬人也，其中四分之三為老若併收養附職之徒，而殘四分之一，為兵卒者，大略五十万人，於是滋練兵講武習航海

術而驅募天下之罪人以開拓蝦夷及八丈無人島傍練煩艦之術矣夫砲艦者騎射之大者也固六藝之其二也古昔武士咸善騎射賞之謂弓馬之達者也達者熟成之謂也方今天下之士肉講騎射以設陸戰外練煩艦以備外寇是又今日之專務也今戎虜愚弄中國者以戰艦火器不備故耳今煩艦具干我則彼必生備干我之心是先攻敵心之術也所謂守是攻之策攻是守之機矣於是乎更轉攻守之勢我無形而形人或擊或侵令寇深懲無傷痛之患矣故砲艦能整則乖其所之因舊範以窺機風馳電擊攻其無備出其不意先討三韓更建府任那以再復先規或責渤海之不貢為師旅屯營之地常艤高舶而到于定海及香港探索夷情殊驅加三韓之士兵而誅寇如鷹鸇之逐鳥雀跨駛巨艦蹂躪百臺卷帝宇內以葦爰夷令天之所覆地之所載殊方絶域普冒皇化矣哉書云功崇惟志業廣維勤不可不勵也夫國之大支在祀與戎故播長計原於舊式大興祭祀搜繳弊害悉芟夷焉（凡世間弊物不動如莨菪最為甚往古中國

所未有也、蓋謂虔長朝鮮之役兵卒滯淹于彼土、而弄之流入　皇國、三百年于茲、當者豈臣民及大猷公而時、雖有一旦嚴禁不行于世者、不深慮舒究故也、其後絶無明禁、猶〻習弊、一日識于一旦、今弄之者居于十之八、其害不啻田地也、皮革布帛金銀銅鐵篠礪人工等、係無用之翫物、而鑠銷必用之數物豈可不悲歎哉、旦此物、元來出于西荒蠻奴之地、故愛之也、無謙遜辭讓之礼、貴賤主客之別、相對恣哭焉、蓋亟仅之常、而禽獸之態也、戾于　皇國礼讓之風、回雖非礼義、篤行之君子、可弄者、賤氓頑夫之態、漸移于高貴、勢至于難制也、無他士氣放惰、無庸此下知不識、陷蕩風耳、即今欲絶之者、不可息而可嚴、譬自今、年十有一歲男女、始加禁令、逆者每年點檢之、若有犯禁者、刑焉、寛其期、而不責、四年、嚴其令、而防未先、旦　先非、革弊者、賞之、則五十年之後、必絶於根本矣、不則當爲後世鴉片之媒、如興念、茲在茲、釋茲在茲、西土之覆轍、豈可不懷哉、憶

夫冠袍、在位之服也、無位者、無法服、故折衷古様、而更制法服、或以色分等、或以制正位、表具容儀、裏要節儉、原　前王之法服、復君子國之實、以制止僭上、濫奢矣、昔者雖無位武夫及工商皆冒烏帽服、法服、服、制有数、日水干、上下同直垂、上下同布直垂、上下大紋名曰素襖、上下同小素袍、上下同十德、小袴、同肩衣、四幅袴等也、烏帽有新古冬家之折形、其変不可勝筭、然故今昔之、雖有四織戦爭之変、不敢去礼服古之制也、故戦死士咸爲子路矣、脱帽露項、固深愧之、譬猶今人脱禪、露背也、無帽者、土民也、故有黎民黔首之名、然而今不啓無帽、却剃頭髮、非忠臣孝子之風、旦女子亦出門、必蔽顔、其面、雖市女賤、不敢露面、古之風也、今也、不然、如使四百年前之人、見今世、當愧死耳、臣倩鑑諸上世、用諸海外、忸怩冷汗、濡背腋矣、蓋近古乱世、餘風習爲恒、用百寮、戴帽服色、有制今却　中國如此、恐稟相氣之侮嘲乎、不可不復古

焉、或書云　後光明帝已虧嘆之欲令幕府制武家法服、將　命嗣　月子時幕家獻匡策　喫之而須史　崩矣嗟天也吁命也萬機咸復千古擬治延喜靜言思之寤辭有標也、

天曆興復也倉不動倉于諸國、而儲畜凶荒軍旅之變災、或設平準之署、播常平法、以巨艦運米穀則糴糶之權在上、以是豆制博徒、更革鑄貨幣、為純金純銀、以示信天下矣、平時卜　皇宮於帋濶之地平安京也在四方山嶽也　桓武天皇延曆十三年定　詔曰山背國山河襟帶自然作城宜改為山城國也如斯以險隘之地作　皇都蓋有故矣從是以前暇夷大叛　宦軍屢不利至田邑將軍始奏捷世態如斯故姑卜險要地以為　皇居亦一時之英策也雖然非永世可定　帝都之良地也上古　神武天皇都於橿原、中古源將府於鎌倉及近古豊臣氏於浪華源君於江門、拳帋濶之地也、草創大業之論、帰于一途況中古逆浪起也未得一　神器不動也、肖宇治瀬多之險無憑乎、山城之寶效、果曷有哉、彼九州之險也是不一姓無德何憑焉、　帝都固不可犯不可為戰場如有變則泝時更占　播遷之地可也、自浪華城　遷幸　新宮、所從之將卒右之疇之帋其土也、於是興復大學察堅國學校傍講武練兵宜明國體、革學風矣、大學令云凡經周易尚書周礼儀礼礼記毛詩春秋左氏傳各為一經孝経論語學者兼習之凡教授正業周易鄭玄王弼註尚書孔安國鄭玄注左傳服虔杜預注孝経孔安國鄭玄注論語鄭玄何晏註令條如此後世　法良知等之癖學流　入　皇國令猶其說者不勘亦一嘆而已不可不改矣、或矯　崇神天皇令臣下觀察三道之例、

或每三年若五年令大將運巡觀諸國海岸注古天皇親師兵征不庭不則　皇子皇后代之是以　王室莊嚴固勿論耳夫將軍者大任在軍中則有君命所不受而大權所歸也故昔者不委之臣下　皇族任焉後世以臣下任之而大權移于下遂武家跋扈於天下而閑霸業是自然之勢也於是　皇室衰微滋甚矣由是觀之　王室興廢在武否興故將軍者必以皇族可任也斷而欲勿委臣下矣

或每八年若十年天子一巡守四道列國家君迭奉護　朝廷或二三年乃至四五年等國之遐通而異其度輪環述職萬機之暇駕龍蹄帶兵仗帥　皇子　親王　諸王及三台九卿雲客併在　京武士等以催蒐苗狩將鷹犬所謂據朝田從獸夕獵起禽之國風如弓場殿騎射相撲亦復古一皆撰　烈祖之德行遠三風十德使不殺神武永赫〻千萬世則可謂及本復始之賓效盛德大業且備一定不易萬世不拔之　天功至焉是臣積年所以禱恢復之大意矣雖然輒軻以頓未成一二破産離國於今四年幸肉白骨可謂奇偶智畧不如亮望肺腑游說不及蘇張舌頭畧瓦畫墁為彼舟身潛流四方雖不堪匪石匪席之慷慨然匹夫小醜不能奮飛悲哉故不顧納約自牖之非禮欲誓神明

以為　公陳誠意將震動天地矣書不盡言言不盡
意加之不學無術寡聞短文固昧文章意之不達章
句不成請　公憐顧宜垂　英察焉兢兢業業再拜
稽首失敬死罪
文久革令初稚日

加多志登天世甬揚可彌之大鉞君賀力丹如何
傳餘良武
舟等作霖止為豆大王乎奉弼大丈夫乃君

三冬盡春西為礼婆國原者霞之古免海原波鷗
立堂津可愛國邦見万志乍秋去者八束農稲舷
穂耳出天曾遠守流盧迺露鷄佗波尊岐御衣二
掛里剣例毋畏已高殿從民乃寛通餉焚賑毘見
備敝朝田丹鹿踐興之夕狩耳鳥踏立懸万久毋
文通恐志天皇毋弓箭搔頁百多良須八十伴男
毛帯刀裳仕奉呂比馬並天字佗乃大野二御狩
世志其大御代甬梓弓引廻豆與其大美世耳
御執廻弓弭振起之宇多能二美加理勢之世通

挽回之至余

度々生又和泉此書を見て深く感賞し大久保利済をして感揚せしめられしに因て己が意を以て一挙せんとの志ありと密に語りて上京して一挙せんとの意を以て国老の志意と符合せり去る隙みて利済賜暇として金十兩を貸して実は度の初也とて此時西田翁すて薩士数人と倉卒の小即今天下大勢に応して如何せんとの論を発し居り己が意を見也と自然の情霊論を聞て感へたるの類なりと見るべし幕府を度天下を傳て卓偉の歎抜を度天下を傳て卓偉の歎抜を感せしとて拙私後の還て松村氏宅へ一挙を企て薩藩と京に一挙を企てしに所藩大家の惟治漏洩のさ大成る告しこれは甚不平して国老吳下等を合せるかる大事を聞て夫る意せんの為るの流て知るる如く

殺ひ奇なる心ゝて医師やくと責めしよき家
に浪士の怒裏をるあるを漏泄を恐れて殺しめ
謝しまり既にして久留米藩の賜金を
書して弓山先祖之墓前に石燈を建て
此時安積武貞の旅費を寄し佩刀まこと
法部せしを見て捕へて獄に繋ぎ刀
を買ひて無へなとするを家者まこと文久
二年となり和泉米発達の頃に及ぶ
秋月の藩士海賀門直求の幽閉せらるを

救ひ動めて統之せしの豊後より山河一般の
家に移り相住ひして大坂に下りけるを此前後国内
一般綬蔵等の勢幸して大坂に会せる志士諸
人に及ひ急津式乃の動を候ち入洛して事成
挙へとして国臣先入京一墨華院の侯人吉田
玄蕃重義に勧て家老を話を交る云
羅て奉家老は書付天下の形勢駆くとして
懸夷むより逼て論くする大義に諸り共
機に不安事に無ハ人脚小麻痺の毒病を嬢せる

如く実に國祚の存亡命脈の断絶此時に有之
候ハ人々天日を仰ぎ地を踏ミ
居候儀に無之候間即　徹覽仕度
の期約満ハ也若北三ヶ所　冥港に成候ハ倫の
高論と申し　幽廟の御を襲迫　殿下
を也せしの軍艦を繋ぎ　砲台を築へ水陸を
要塞すること　神州動揺に象して
新地の胸中を裁切せしめ　首尾自
平然應接の道運ひ　不恐　風聞に帝尤

雖異邦印よりも甚しく　第へ及て動かして外寇攘
掃の策可施御計を乗ずるを乗じ　尤祇蟹文
の風を変し　乍居腥膻西朝を平すること
或至ること俄ハ続新よりハ明なる事不有
者三年ものより　御心配仕候源も畢竟之ハ
義旗決挙に不仕ハ　ハ僅数百人の事なる　志を通ること
不能　御之後害を引御　陸を動ること
是源なる大諸侯人を動ること　迚も不可事と

因循仕居候間
去歳幾多くも云々幕廟より能く國家をも
ゆ体忍ち浦和舊例をも顧み慨歎の事
何時暴虎馮河の徴を動りも難計彼是以
て下有志の若扼腕憤激仕義氣十分に表立
機節を顧り体己去年十二月一書を投入
薩州の実有之候一藩事の奮起仕候即一封を修理
大夫の実父島津和泉より内々に内藩

あて出奉修理大夫殿府の事を処分あて奮発
お成遊ば山内豊範の実父修理を後事改り修理実父
名代として和泉出府と申事決定し則
此度上京の儀ふ申出り申候是藩の一忠誠
勅命の儀を決し西海山陽南海諸志士如是
奮起或亡命脱藩して上京仕り京摂へ潜
伏仕候若も数多有之実に止まらず止まらず
必死破決を仕候是非共此度世変を挽して恢復
の奏を完遂仕候斯て人氣奮立

大機会を之未有所ずして不義世代一時の怠慢
若此機会を失ひきりて小義を嗜共手後決し難
来未一機の出来に至決義仕に上に怠
不断の所業を動かに心を用ひ毛頭怠慢なしに
用ひ八洋拳仕く中も上策を以て
世を治して主功十分の出来に若下策に落ち
常して無効を見たるに部て後害を蒙
候も可有之哉に恐 神武不世出之叡断を
以て第一上策を御採用遊ばされ一挙を

もをもつて三策減を定め遂に主備
天皆に宣揚聖戦を意願候

上策

一遠津和泉常陸中一論命ずり毛花城を援
花城を大一二條の城を屠りは時一挙を率
し和泉将帥として上京義更を追拂ひ東西
宮の出門を辞去り巻延の上 聖勅を奉し
蹕を花城に奉還皇威を大に張り七道の諸
藩に命を伝ひ 陛下親しく兵衆を率ひ

始めて出て面顔のみ暫く行幸とし一旦幕府の
科を正し即奇非を悔罪を謝せしめ官職を
剥き爵禄を削て法典の列に加へ以て命のみ
殺さず付に遠流に処す伝説するの第一上策とす

中策

一和泉和伏と綸命下り上毛出て幕吏を排し
栗田宮の邸内を解二條城を拔く是る寄大
夫 皇命を四方に布き義侯を募り其後
華城を拔く大駕を還し奏して幕罪を正す

是を中策とす

下策

一和泉出京陽明家へ参殿の上漸決義を幕
吏を攘て栗田宮に出軍解二條の城を拔て
是より宮闕を警て 皇威を張て幕罪を正
華城を拔く当攘を誠に為を下策とす
右三策の外凡公武合体英秋挙攘拒とし
遠根元姑息平穏を好み不断隠慮の猶豫
より如何ともなき偶会事行きゆかざる 十分の

為義公義光策を大洲のまゝにて　皇威発
揮し万々歳　神州安全之基ハ実に百年の
御会盟之機会ハ已五ヶ年に有之即宗族
より尾水越外侯より土因薩の如英傑俊才
代々之を論ずと雖も驚さらし所報を
甚後益衰頽窮し幕府を擯斥の策ハ
古今愚策なり決して行はれ難き如此醜
虜親睦仕方ハ幕府へ御会盟の後ハ恐
矣既御会盟の時縁ゆて自今三ヶ年も

過ぎ幕府ハ一際板挟し　叡慮断然
海内養生之秋一心一洗憤懣の様　聖志を奉
戴ハ　皇邦の為ニ恐困難を安危此一
挙に在ハ何事一等上策なり為神速ハ
天決奉仰願ハ誠恐誠惶頓首敬白
文久二年四月八日　筑前浪士平野二郎國臣

此書終に九重の天に達し後大原左衛門督
勅使として関東に下向せらるゝ日北条中乃

流を以て採用せらるべきやうに見えより平壓二郎の
名豊野をして薩摩の旅館中將（法名義）関東下向
とゆきしかれば國民薩人伊牟田尚平永頼武
樽人にて世間の胃を三百播磨北大藏谷にて已の
意を述し書を捧げて後客居の船き乘潮
しきり勉勵せしかば永頼は禁を犯せし者
なれば薩人跡を追来り二人とも縛せしかも
國民は彼を実係せしれば中將の旅宿へ送きり
此時中將宿疾費し帰宿して療養せんと
せらるる即國民の渉を解き衣服を與へ堺の側へ
庵住居しめらるる後と書はせ尾る云
御帰藩早速断絶と御決案ありて事一統
人氣奮立て報事總面一御稱賞を賜時勢に
意
和泉の藩公と御論互藩ありまそも
相模青山侯よ方は産成組合を限実事よ
ゆて僅よ百姓共の張士浪華よ潛伏京
摂住東仕度をさく捕押降ふ信衰弱
幕威まて討くを向て藩勿論を法を法責

も有之候輔翼一致ニ而可有之 合有之候而も
朝敵ニ相成候儀ハ路頭愚夫頑民まても不好事
ニ有之候ハ決而御赦免ニ而者ハ有之候得共畢竟
於実ハ衆諸侯討手ニ被仰付候者国より名義
正ク晴将ニ相成候ハ、恐多くも不足者ニ有之候
猶ニ断然と執之を詢り附而御隣藩まて
之儀ニ帰し是ハ張督候得共御成候ハ、
藩権清純仕ニ相兼ねて罪を謝シ候外無之
所存ハ有之候迄ニ御座候よしや利害ハ義迄而も

当日当職ハ御忠義不被為得ハ天地神明
ニ擁護も有之候ニ付而ハ肥後豊後周防
并ニ当・末家ニ義を詢り候ハ
長周筑後・久留米田・筑前ニ而雖ニ而御座候
其藩ニ而も中川之儀も河流島魁ニ而候ハ
九州まて一藩ハ無疑執之ノ前ニ在之哉
左候ニてハ逆並ニ軍を以先本藩ニ而使者を
以其方様より請護ひ不遂候ハ、水火之混
燥ニ従ひ候如く然一縦まて異儀有之候補

抽三藩以会稽の上米都をかゝ侵襲
を企図し機を窺し大概西国
八不日内に上陸せ甚しきに至て山陽南海等の
誘ひ を経御出京を待て則逆徒先の道を
叫ひ五畿始めは震動して後は農して脱兎
の勢有之部を分て北御門迫し深謀遠
慮の極を御打て一
天朝へ北御忠節抜群
なる御家北は名誉莫大と雖も御
快定なるを不肖の私は家を抜て家仕

楷神家を結ひ隣邦を誘ひ御和親を
絶ての命令を下し私五十絶書を以て
御家を五畿九州和親の巨魁と成て
多分を勢て周旋仕度を唯今薩加
第一長の勅印をもて部を発し
つゝ何卒御国威天下に輝く有
之度事を絶して兵を抽速を考へ
已に新光はもも行義を道草履片足下駄
片足にて忙しくも神速なるを功多きを

此度は兄事と識と形と勢とに三つの必有之
者なりと在れ勢に従ひ之へハ常となく印となれ
ものなり在れ形ち顕るゝして事を成しかへ之
勢と相追つゝき是又印出さハ所謂機を見て
先制すへしとハ兵家に於て角一家ある事ハ
一国小藩より大藩ニ至る迄百事熟慮遅く
延ふるの有ハ自然の機会不時に之へハ格別ハ
御英断不為ありては人に後るへ迄時に至り
しても印なきもの有り　つらつら何事によらず識

廿日限り出帆へ相成候は精選御英発　御遣ひ様有
仰願上ル
赤馬関の達せらるゝよしにて藩より洋製の船を
としてまねり国民ふを船をえまし令せら
されけれは上船せしに忽ち捕吏君命なりとて
縛せんとするに国民従容として余も君命なる
船を見るなれとて再組を覗ひ畢りて縛に就き
しかは本藩に押送して獄に下されけるに
年老し親の歎きいかはかりなん今はいかなるを思ひつゝても

又獄の取扱よりやいろ〻合箱に底に紙捨をなり
て得て　元より獄よりすまし自殺しし
ものも思なり悲しとしも好りなり樂
といひて止なりしと論ひ小獄中小音信
許さるとても容を收めらるかを　思ひ
ものとやいしとの極致なるこいと六ものしく成るれ
ば〻とよりも後讀書筆墨をもを
許さるなは毎日牛食張止しなしも感なし
とこしられも許しなるは接を以て文字

を裂して紙を糊して畫忠録二卷制書礎
策體數辨　征冦統國圖集　神武必勝論各
一卷を著はしを裝巧みもして字雅なを
必勝論の尾よ　君の氏此安まかりなを筆を
より更に花宇となりて人を獄中一冊の
書をも無全考せしめて論説古今和漢の
説りて證諫なし　具る人を記性博識なるく
明力文久二年三月免さるく使源方屬吏よ
命せらる五月保國策一篇を邦君よ獻し

こと暑よ云上策ハ

京師播紳家御取結ひ之遊之信立て抜ハ畿内
の中一揆密の使を選て抱屋敷を築立
鳳闕御守衛之遊客東西を諸侯を勇ハ
二つなきのみ全りしき紀況よりなくハ見もて
受持其上長崎守衛を犯前と一体受持
仕ハ家国家ハ頃西の使よりなくハ無遊
密々ハ元来也崎ハ唐人和蘭陀等商
船不法有之言ハ鎮静の居ハ方なくハ

ニ事ハ如く夷狄彼港ハ入津仕時只所
の様式にて神州一体の風聲も係り一家
より人家ハ人名ハ人名数ハ守衛仕
ハ俄如海ハ等ハ近年の如く畿内近海ハ
度治一戦ハ指前ハ東武内海ハ
夷人とも有用御御仕様の事ハ
長崎ハ実ハ商船輻湊ハ一小港ハ
彼今ハ一系掠奪せ走ハ異深く皇国の
傷ハ羅成ハ場所ハ言ハ唐の様

拒ぎ一度ならず十分に力を尽くし同じく小生も
勅命の志を貫き験を錦旗に立て一ヶ所守衛
を仰せ付けられ一番乗を以　皇朝御守衛
の為に相成候ては勅諚を以て仰せ付られ感戴の
御先代様より二百
年来の受持来りて他藩に江戸府内
御警衛の儀は御規模を
御大切の儀に付御一番乗に成候事
の為御当藩も
御警衛を仰せ付られ候
神武天皇御創業より御
古来英雄豪傑の人物を生出し
豊臣公等も皆自威を借て大業をなす
事は非常の時に臨み非常の
人物を出し国家を興し
丈は本藩御警衛の為に
御藩も之間より藩出の勅命の志
藩自ら金穀連衛を疑ふの時は他藩の儀

を以て聖主永世保安の大勝を成世元和偃
武都北條氏滅亡し三人全無失の良策なり
其後家康公中納言を元東照宮家康公御立而より
りは中國を薩摩に渡知行より士卒代
人数業現実五十万石の広振にて無之故恐
一国獨立あるべき天下模倣の論無免難と申
不レ文の勢は先無無人東北見て申上候其
故三藩を取鎮連衡不多生して他邦の侮
慢も難斗幸小藩品は君公御生まれて順聖

公氏以来御親戚御親戚なる故生て家を未何とも
御政方氏陳遠の振よりて家如何の広狭今日
り邦と密よりて親戚は薩品の風は古来天下の
強国強不今歳の風魅まして外より肩を並べ国
無し国邦と云る結て広狭と交通之は中津
久留米等も広狭なる故之は御全神の計
ひは多年なる事も定右薩摩本津と云合せて
只藩数鎮連衡古驚之侮は他藩の人の覬覦
侮慢の会は絶て起り申分数は是文武を固く

すなわち一長計なり

同年七月日薩の石井仙次郎廣鄕と共に國家の為に尽力せよとの薩命を受けて上京し彼地と共に國臣八列に中西忠了用事向きは京都にて和達人にて先に國を出でし甚時草香江水陸と改称して地行三番丁に家を有る時　海山に潜み一龍も吟て今日に雲ゐるに立登るなり此歌短冊に書き和一られ立寄りに伺へて秘部を見せたりと

入京して自述の國體辯を学習院に獻ず是より先に　朝廷國事鉤りを重ひ国ひ求む久坂義助に撰ひ求む

玄瑞通武轟武彦藩寛敏國事向貢ハ公卿士庶の為ちなく賢明を撰ひ活へと建言し行る

八月十六日　朝廷より國臣等を召して学習院出仕を命じ國臣に勅下を督せしめ

玄瑞より國臣即日志とせよ之攘の大事成決議し　勅伝の盛挙を賛成せんと此時

天皇　神武天皇山陵を拝し給ひ春日山ふ
駐驛して親征を議せんとの勅を下し給ふ
國臣も常道にて大なる志を得しより中山侍從
大和に走りて兵を挙げしかども事成らず國臣
を捕へ給はんせしに先帝より到りて其暴挙
を制し給れども既に親を交へ行きし流術は
行はれて攻高せしより朝議大に変し
長門中將の堺町門の警衛を罷め其藩士に
入路を禁じ給ひ公卿の輩も謹めらるる事

西三條中納言公美卿を以て國臣を選ぶ國臣
上既して其七人及び長門中將と實典に変
せらるるとし請へとも國臣学習院乃
官員も散りぬれば國臣も身を引て木屋街
の山中に隠れ宿せしより或秘幕吏
新選組の者を遣して捜し捕へんとする
國臣八方手を尽せしより酒樽に隠して生捕さる
樽を使に遣はして國臣帰りて余を樽をるす
報答して預かりし所を言ひ一の行度の事

[illegible]

[illegible]

乃至を告てう其書ゟ云

從三田尻一輪啓上仕候益御兼帯恐悦
二拙儀去る月廿五日京師を發し別紙
又々京西より同心もの十人斗探
索入込不交為知若しくは去月廿五日夜
和泉山城播磨辺へ出張所に聖下り申書
書取り仕候に決策も有之旨を過り
ゟ北方ゟ云ハ三條公を御御統之内
七卿方ゟも追て相渡長門宇佐ゟも使者

山口ゟ三條公ゟ文命に而用ゟ御馬使借
屋越家老増田彦右衛清水清右衛等へも追て
和会仕候ゟ北方ゟ都合ゟ大概相調ゟ体
不日ゟ御到着被成ゟ義兵を挙ゟ勤王
天下ゟ大挙を仕候ゟ倍候に成ゟ此事
多端ゟて繁雑筆紙中旬ゟ之ハ必ゟ耳入
候可有之歟ゟ然ハ無義後都ゟ邪魔と存
ゟ暇を乞ゟ指返ゟ御ゟ後ゟ後ゟ心を添
ゟ存ゟ日ゟ迄ゟ速に帰ゟ大事ゟ協ゟ源ゟ以ハ

乃至と告てより其書を云

従三田尻一報啓上仕候益御業務幸福恐
二拝復去月廿九日京師を發し別紙に記下る
又々京西より引続き十八日探
索人不交為知者なし去月廿九日夜
都を出船播磨へ出者所に聖下り中山卿書
者所を下りし御使決策を有之者方に迫り
ゆえに北方まてハ三條公を御使立の
七卿方まも迫て相謂と長門宇佐まも伺候

山口より三條公より交命に付用りて御馬借
屋越家老博田彦右清水清右衛等へも迫て
和会仕不最よ北方代都合も大概相調ふ仕
不日に但別へ屋敷に義兵を挙大勢應援
天下九大事を但し侯に出先に北事に
多端にて繁忙筆紙中旬迄ハ必正月に入
候可有出発然ハ無務後都に邪魔と存
候間暇を乞し拝見して中に御伺心を添
若し拝見に迫て連に時代大事に協る源と出ハ

入用参し旦款又の忌紀を年の不申さと存し
なし通るの事は親元に迄一この節は東京
を仕て御此者より　つつしこは言葉より式部より
天朝の御為一命を抛ち上は再澤新と成て東
為一天運強き東都を執て澤新可仕は
唯こ西君公御を仕天下後世の鄙名を輝し
ゆを陛訳の節は事を事務仕不参こ罪は山く
御免ことを下に代後こ撰係に賞功可奉人見は
恐惶敬白

十月朔日　平野二郎國臣

尊大人様

淺香一索茂信月形洗藏詳等に贈り書
尾て　今春に　まて郡に国紀茶御幸
あ毋ことなきて止むべき又曲郡龍高落雄戸
田六郎萩弘中村哲藏敬信は　大事推け
あて　親命今こそ持る時は来るべ
と書送きて　細澤氏は夜よ来して　お話と
て國臣日厳の藤四郎茨親等と旅裝

甚寓居の彰賢園れりる行しよ寂然として
音なし止めらまつかと各心を痛めしよ客上
よ二三人の足音して俳徊するのみ國吾即ち戸
の岸風も跳らハなとろ踰へきん羅綾の袂を
幸ひなとか聞きさんと古曲を謠ひしよ
國吾の在るを知りて客招を放して帰る
かは國吾義親及ひ日蔵乃堀内郎義則 仙田
清三郎正弘 秋月の戸原卯橋継明 長門の白石
廣作小田村信一 南八郎 稲田小傳次等数十人

随行して帰る時して去る長人琴を和を弛せて
追ハしめもれとも及ハす事終に既しを橋慶
る而りしに吉野の義信潰へ知と聞くに
散去て後挙を期せんとて人を有まれも國吾
既に一決しめれい人今更止るへきよ詞に別
策家施さんとて上陸し但馬に入り荒川支計
を遣して出石に仙石讃岐守に澤主水入京
して三條卿等及ひ毛利家に寃罪訴へんと
志し先家吾を上洛せ しそ情実を探り

しめ其報を待つて銀山に在り使者に命じ
動を事とし私に事由を審にせん煙報
あらんことを恐るるかあるを告ぐることを
仙石氏主計頭摘発して幕府に報せしめ澤
氏の逆謀を糾す銀山代官川上猪之助の解を
を聚ひ金穀を取り軍用に供して京
都に迫り幕吏を挑ひ攘夷の挙をなさんとて
檄文を廻らし幕府攘夷の詔を奉せん守
護職松平肥後守等詔を矯めて正義の公卿を

斥け親兵を解きて主上を孤立して壅
蔽せしめ強り此時に当りて男児たる者身を
抛ち力を戮せず速に奸賊を除し外夷を攘
はざる有らんと告げ行きては士人群起し且
水戸長門等脱藩の志士来聚して近畿大
に動揺し幕吏等の招き姫路龍野豊岡等の
諸藩に命じて攻撃し四国を参謀となり
澤氏を奉して養父郡妙見山に拠りて拒
戦しむる小島金兵衛士人大敵に恐怖して散潰

一或ハ反應に國信等捨身拾闘して各攻
寄を繋ぎ一きたに統九國信の腰骨より中り
且絶よりよりて小屋に受てを歌を詠して
云　世の中ハ引よりて引よ山猫ちるこそ
花の心なりけれ即澤氏を勧めて立てしめ
ありきたる小松の田岡新三郎出石の立花甲太郎
等を随へて伊豫に発ちて十月十三日軍
敗きしきハ戸第七田村南和田及ひ其久及
新三郎肥田左衛門西村清太郎伊藤三郎下瀬

猛長井民秀大郎長曽根助等を始見山中まて
戦没一或ハ割腹に長曽我部と薩摩の美玉
三年親輔但馬守中原太郎中條右馬等ハ退兵の
為に殘さし太田西道と因幡の大村辰之助横田
友次郎膳所の本田素行等ハ虜となり國信等
主水正殿を殺せしを見て西に走しを
豊岡藩人に追ハれ十名竟に朝倉郡綱等
乃郡中まで捕へ京都に護送一方角乃
物ともなりけり創サ一愈々ハ神皇正統記

を薄して出奮を遂る同盟の志士是を聞く
感慨せざるなし　又自國論を著て明歳
長門藩人老例の悪を排さんとて　禁廟を迫て
しては防長史を敵ち京師を迫て其災を罹る
幕吏此機会を乗して獄を破る者あらんこと
を恐れ獄中囚三十二人を斬る国臣等之を聞ひて
憂国十年東走西馳成否任天魂魄帰地　又
凡くやく人冤死庭の紅葉八何ぞ一葉も散ずに
やてあると書く　禁廟の方を向ひ再拜拍手

後容として刑を執行時る元治元年甲子七月
廿日享年三十七也此時骨立ち肉脱し顔
髪皆白く恰も老叟の如し　只眼光耿々と
して人を射るのみ是数年憂苦血液枯
燥し肺肝潰傷の極を要すり国臣幼年
より父に使杖縛の術を学ひ
其蘊奥を究め故に係る古今の事実を
編輯して一書を成せり之他剣銃弓馬に
当まて能くさを極め能芸を應に備

学刻導 西木善大文昌陽ハ國居の竹馬の友
なりしを使のゆゑ連夜講書する例なる
しを雅軍り難難を討論して年夜り
ゆるる三年忘れ又青柳孝次郎種春の國
学量井鐵次郎鐵の儒学代講説義能き
雅楽を安永辰十郎縄より学ふを勉強人り
迄除し夜以て日る繼く書を読み文を作る
あとすくさく専師なくして自得の事多
御まても富永の教誨楽る止さるを感し其

死せるを及ひ國居石の流るを盟て製し世
の中此人数らく成ぬるハ大人の教よるもて
なりと宣りしてこて其墓側を立り國居
志氣洞儻識量卓絶細行ハ拘ハらず若し
変化成るを止る西鄙の一説なるよして
朝廷此陵夷を傷て霸府登大ようして命
令天下を行ハ日既る其輔ろを逆てさる
を知り王室を恢復して典禮を起し大平
を致さんと欲し書あるを著て皇国に流寓し

寒暑を犯し辛酸を嘗め百難に堪えて志を屈せず一日も忘るる事なし　尊王の大義を志ざす事久し　年来の活躍は実に能く　其志遂げられたるも其忠勝義心上下を克孚して婦女童子に至るまで平野二郎を知らざるなし　明治一新の際及び藩主長溥卿国防の風を奮起し　皇室衰替を復せんとて東奥に奔走し尽力若身せしを感し　京都霊山に諸藩の志士と共に

石を国防の地石を乾して建てられ又本国の代表する碑を設けて二所とも祭典を命じ其後八月永世毎年白銀二十枚を典して其の英霊を慰めらるる澤宣嘉長崎府知事となりて下令せし礼国防の義挙に志を遂げ遺臣に賜へる恩典を以て其家に香花の料を賜へる明治四年七月藩知事長知国防の勤王誠忠を表し特例を以て士族と

なる　明治九年太政二を士族と　　世襲

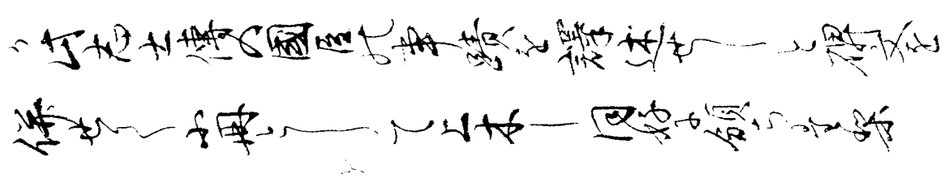
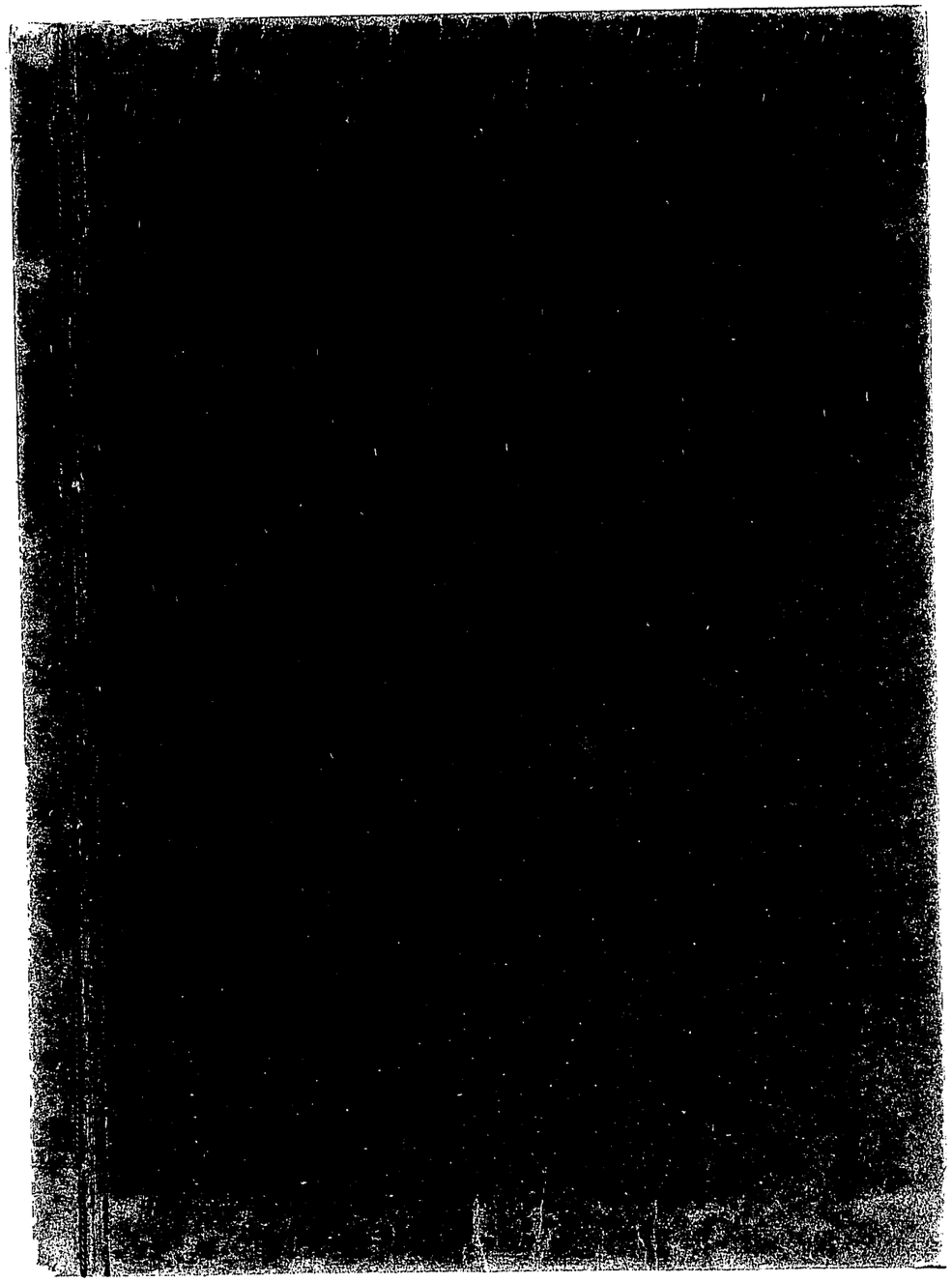
四日月俸と米七石金を給し国昌の絶と種二
の家禄八十表背者鳴稚三人共に召の
後とせらる其後
朝廷より舊藩徳川慶喜
要〻一禄八皆収召し給ひ家を八種二と禄を
失ひ〻る縁令澤簡徳上書して国昌の嗣を
他に立すへきこと云る方を再まして名流しまれ
後種二の内に原禄を賜ひ
国昌八識の外族なり故に行状に其身過ち又
を主と一旦に家に有せる書及ひ元宗
朋友に交間せしと云福徳次郎文英の撰ひし
事蹟国昌伝等を保せ而りて世すること右に
こと〻〻或説に依る領内の士民国昌に従学す
る者多し又米国拒絶防禦の方略を幕府
に献して手元賞銀若干を受けしとも云へ
共之事実也又元治元年二月十八日刑に処し
年四十三一説に八死せりは三十九とあり共に
誤なり又西昌等刑に処の日雷雨晦冥咫
尺を辨せず風屋を破り樹を抜き震動

詰且又及ふ京師士民皆曰光龍てよやう多
とゝのう見雲井よ立やるに欣よ海へせて一語
掛すり、彼也と毎國居の對門の親友山田郎為雄
ハ海郎よ在りて此日天王山の戦地を探る京
都ゆて坂海鳥羽よ及ひしよ戦中に志士
刑よ死せて屍を焼く濃を重れて京と至ハ
延焼尚盛すして炎焔空り海てり日と紅
るまて雷雨ありしと知すと云又前よ載
せて管見第八馬場文英の國居自筆を抜く

臨墓せしとゝふを借もて寫せり 抜萃よ國居の
寄寓せし松村吉文の子秀実なる抜り
寫係せしときを抜よ田天管見録ハ元
俗文長篇すり漢文よせしハ真木保居の清
川八郎の改作せしなるんう
國居の討幕議九章の天よ達せしハ既よ前り
記しなりの抜粋の後三條西公に行状を見
ゆるをねて乙覧を経しを俗知よ其業
幸信へすんハ有へしに故よ甚文を抄して附

載元曰公諱季知字子迪家稱三條西文久二年十二月補國事局議員既而　帝一日召見公等議負數人親下勅語曰朕視幕府所為入則奏攘夷出則締外交言行背馳事多出於欺罔以此涉數月國家必瓦解朕雖憂憤之抑而不發焉者蓋有旨也然近時國憲日顛墜庶民若塗炭朕不忍拱手坐視曩日平野國臣奏討幕議朕秘之胸臆以至今日幕府益違戾詔勅欲以逞私權由是觀之國家命脈宗廟祭祀殆將絶豈拱手坐視之秋哉乃欲親率六師討攘内害外患朕意所期在國是確立國民協和也爾汝等謁股肱力以副朕意公俯伏對曰　陛下宸憂非一日臣等不堪慚懼雖然臣齡已踰五旬老烟何能仆而後止矣是臣之微衷也臣若有保餘齡鞠躬盡力敢不副　宸意　帝再下勅語曰朕不渝命汝等勿敢渝公於是與國事局諸員議論問難日謀皇憲振張

蒲生重章ノ近世偉人傳ヨリ云嗚乎若與國臣同時經艱楚西鄉公生逢遭於郅隆之世陞高位居顯職

則向艱楚瀕死之苦亦可以償焉而如國臣月照或
斃于姦鋒之下或與汨羅之鬼為友豈不哀哉抑若
節之士生際今日之郅隆而猶沉淪乎泥塗者亦不
勝數而當時國臣諸士之所愧齒者往々取貴顯其
是亦有不可以已者歟　坂谷素曰若節如平野子
亦古今之所罕讀其傳想其志實不堪慷慨抑亦彼
一時此一時方今尊　王愛國之道果何在焉不可
不深慮熟講也　川田剛曰慷慨激烈近古世比今
讀三策生氣凜々使人毛髮森然上竪　荘司晋太郎

愛國民權家列傳ヨリ云　或人の曰ク杉晋作春風
御市ノ半夫小楠坂本龍馬真柔久坂義助通武平
聖次郎ノ徒士ヨリシテ明治ノ今日ヲ存セシ
ヲ杉ハ陸軍大將坂本ハ海軍大將武市ハ司法
卿久坂ハ文部卿平野ハ内務卿ノ任ヲ尊ブ必矣
シト　明治十五年四月廿八日を追慕する
等西三位東久世氏ヨリ之ヲシテ國事殉文を撰ス
　　小建てる四十月
　　めの石ヨリ刻ス
廿三日志士大會ヲ開キ典を行ひ且石津豊吉